

萩

Vol. 1

ものがたり



絵図で見る 萩の街道

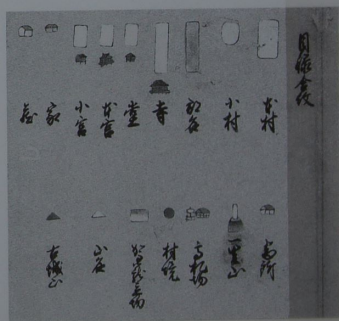
— 萩往還・石州街道 赤間関街道 —

山田 稔

H2

街道絵図関係略図

*本書で紹介する地域を示しています。



「行程記」の凡例

長紙：「行程記」(唐樋礼場～樺西分、山口県文書館蔵)

発行所 氏寄贈

シリーズ
萩
ものがたり ③

絵図で見る萩の街道

—萩往還・石州街道・赤間関街道—

山田 稔

絵図の良き萩の街並

萩市史 巻二

はじめに

萩は、今も江戸時代の絵図そのままの街並みが残っている歴史の町です。萩の城下町を歩くと、当時の史跡や文化財に溢れており、歴史の舞台と空間を存分に感じることが出来ます。

一方、歴史の道に注目すれば、防長両国内の主要街道であった「萩往還」、「石州街道」、「赤間関街道」の起点となっていたことも重要です。特に、萩往還は、平成元年（一九八九）、国の史跡に指定され、その後、沿線の整備も進み、様々なイベントに活用され、全国的にも人気の街道となっています。また、平成二十三年（二〇一一）には、唐櫃札場跡が、国史跡「萩往還」の追加指定を受け、続いて、佐々並市が、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されたことは、記憶に新しいできごとです。

近年、江戸時代の絵図を手にした古い町並みや歴史の道の散策が、人気を呼んでいます。この人気の要因は、絵図という視覚的な歴史資料を手がかりにすることで、タイムスリップをリアルに体験できることでしょう。

そこで本書では、萩藩絵図方が作製した街道絵図「行程記」と「御国廻御行程記」をもとに、萩地域の歴史の道を紹介することにしました。もとより、紙幅の関係ですべてを掲載することは適いませんでしたが、江戸時代の街道絵図で辿る「歴史の道」を愉しんでいただければ幸いです。

目次

はじめに

I 絵図で見る萩の街道 5

II 萩藩の街道絵図 60

1 萩往還

(唐樋札場〜長門・周防国境)

2 石州街道

(椿東・小畑・越ヶ浜・大井・須佐・江崎)

3 赤間関街道

(三見・玉江・椿)

1 行程記

2 御国廻御行程記

3 芸州吉田行程記

III 絵図を作った人々

― 萩藩絵図方の多彩な仕事 ― 67

おわりに

I 絵図で見る萩の街道

江戸時代の防長両国内の主要街道には、基幹道の「山陽道」のほか、藩内街道として「萩往還」「石州街道」、「赤間関街道」、「山代街道」があり、道筋が編み目のように張り巡らされていました。そのなかで、城下町萩は、「萩往還」、「石州街道」、「赤間関街道」の起終点となっていました。

「萩往還」は、萩唐樋札場と三田尻（防府市）を結ぶ一二里（約五三km）の街道で、城下町萩と山陽道を最短距離でつなぐ主要道として整備されました。萩藩では、領内の街道を「大道」「中道」「小道」「灘道」のランクを設けて管理していましたが、萩往還は、最も上位の「大道」に位置づけられていました。

「石州街道」は、周防国・長門国から石見国（島根県）へ向かう街道の総称です。これには複数のルートがありましたが、萩市関係では「仏坂道」（唐樋札場〜萩市下田万仏坂）、「土床道」（唐樋札場〜萩市下小川土床）、「白坂道」（唐樋札場〜山口市阿東町嘉年下井戸）の三ルートがありました。本書では、このうち、日本海沿岸を進む「仏坂道」を紹介します。

「赤間関街道」は、萩と赤間関（下関市）を結ぶ街道で、「中道筋」（唐樋札場〜秋吉〜吉田↓山陽道）、「北道筋」（唐樋札場〜正明市（長門市）まで北浦道筋と重複〜俵山〜小月↓山陽道）、

赤間関街道分岐点

瀬淵

榑西分

榑町

榑本川

*村境

榑本町



萩往還

唐植札場、長門・周防国境

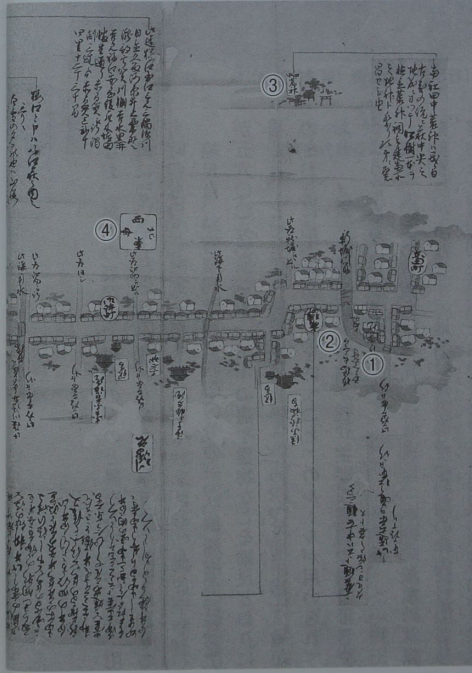
東田町

新堀川

唐植町

川島庄

御許町



萩往還は、萩、山口、防府（三田尻）を結ぶ十二里（約五三km）の街道です。萩唐植札場を起点として、榑本川を渡り、瀬淵の分岐点を左折して、明木、佐々並を通り、国境の板堂峠に向けて山道を進みます。萩市域のルート全てを、明和元年（一七六四）頃の「行程記」で紹介します。

明木村

梓坂
* 村境

一里山



橋西分

和泉寺

大屋

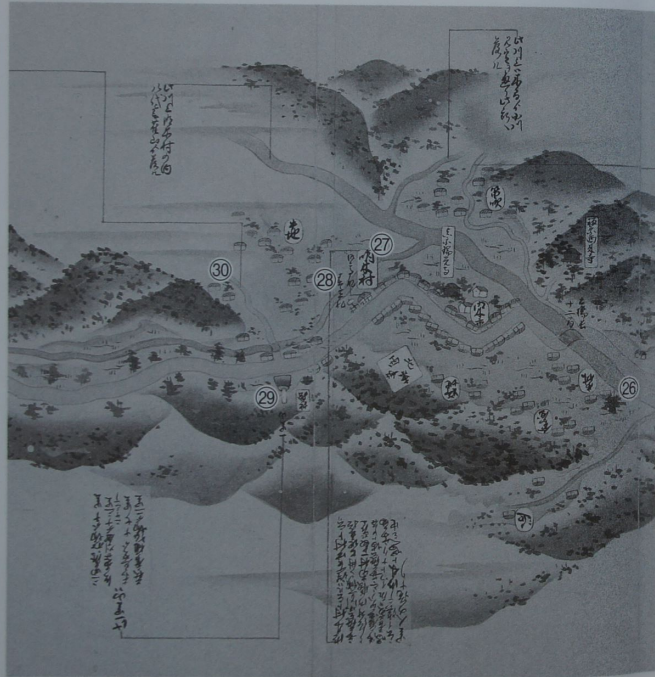
千法師



明木市

明木村

一里山
赤間関街道分岐点



イスノ嶽
権現原



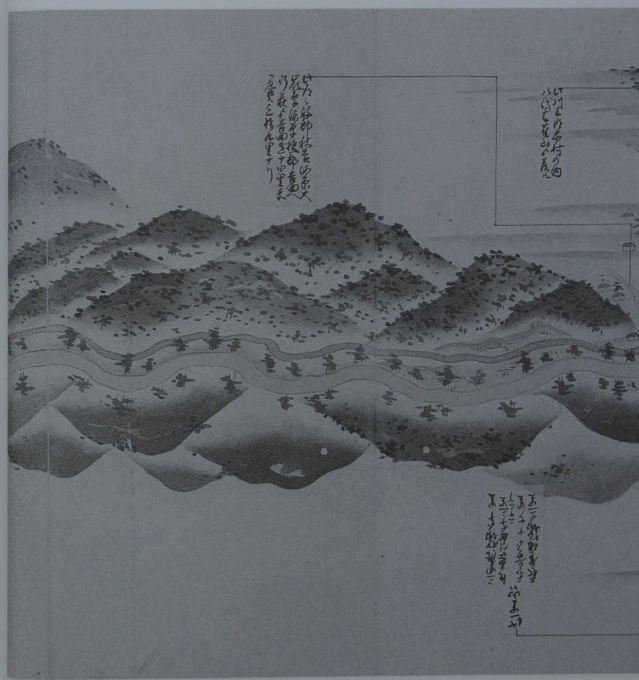
新切

新切峠

一升谷山



明木村



落合

涼木

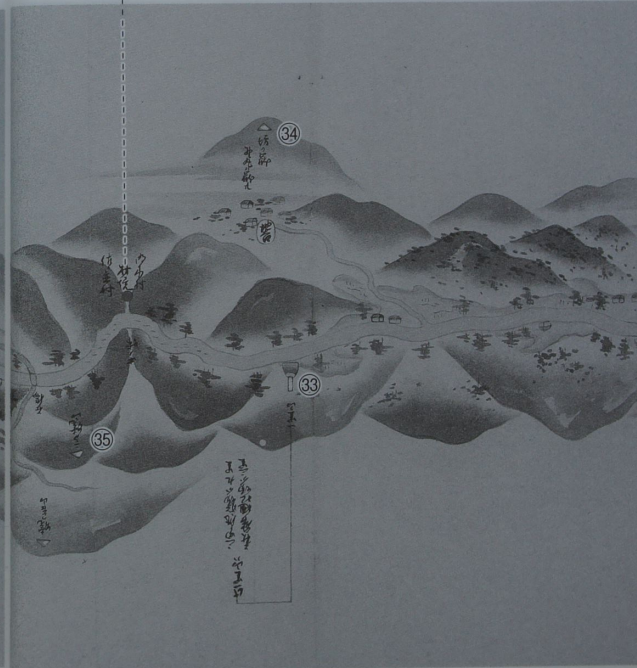
佐々並村



明木村

一里山
方ヶ嶽
(野丸ヶ嶽)

*村境
高焼山

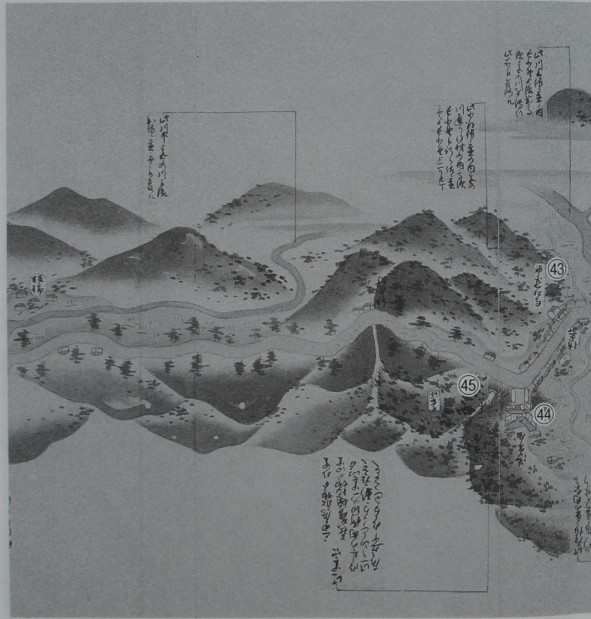


板橋

穂原球

一里山

佐々並町

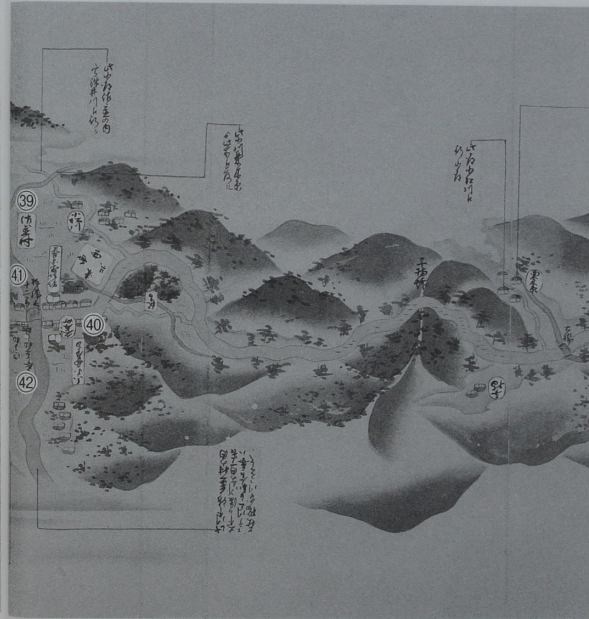


久年町

佐々並村

千持球

千持



古高津

一里山



佐々並村

日南瀬埜

日南瀬

板橋



宇野令村

* 村境

宮野村

周防国吉敷郡

* 国境・郡境・村境

板室坪

長門国阿武郡

佐々並村

夏木原



佐々並村

長瀬



萩往還解説

図中番号、名称

- ① 唐樋札場からひふたば
- ② 唐樋町
- ③ 田中荒神
- ④ 方位盤
- ⑤ 大橋
- ⑥ 番所
- ⑦ 天神

解説 (一) 〓 絵図中の由来書の大意を、現代文で記したものを。(二) 〓 関係の指定文化財

幕府や藩の掟や通達などを記した高札を掲げる高札場が置かれていた。萩往還、赤間関街道、石州街道の起終点で、防長の一里塚の多くには「萩唐樋札場より何里」と記されていた。平成二十二年度に復元整備。「国史跡「萩往還」」。

【唐樋という名は、昔三つの樋があったことに由来する】

【当社田中荒神は、民間の古老の説に、萩の中央の場所にあたるため、一本の松の木を植え、荒神祠を建てて、当所の地神として祀ったことに由来するという】
【行程記】(「御国廻御行程記」)では、画面の中央に道筋を描くため、方位の変化は、適宜、方位盤の向きを変えることによって示している。

橋本川に架かり、橋本大橋、金谷大橋などと呼ばれた。長さ四十八間にちなんで、いろは橋の呼び名もあったという。現在、県道六四号線上の橋本橋。

警備や見張りのため、番人が詰めた施設で、各地の要所に置かれた。

金谷天満宮。神社前は萩城下の出入り口にあたり、大木戸が設置されていた。

⑧ 大照院

臨濟宗。萩藩初代藩主秀就と、二代綱広から十二代斉広まで偶数代の藩主の墓所がある。「国史跡「萩藩主毛利家墓所」。重要文化財「本堂」「庫裏」「鐘楼門」

⑨ 中津江

【書院】「経蔵」「木造赤童子立像」、萩市天然記念物「大照院の大フジ」
元禄の頃に安部春貞(歌)、山田原欽(詩)、雲谷等璠(画)の三人によって萩城下近辺の奇景として、鶴江夕照、下津江落雁、中津江夜雨、上津江晴嵐、桜江暮雪、小松江晚鐘、玉江秋月、倉江帰帆の八江萩名所が選定された。幕末に木梨恒充が著作としてまとめ、明治二十五年(一八九二)、山県篤蔵が補正し、「八江萩名所図画」として刊行。「行程記」では、八江萩名所が各々紹介されている。

【中津江というのは八江萩の内である。歌に、「更る夜の雨のふる江のしつ屋に残るもほそき灯のかけ】

【当寺の山号は白牛山という。由来は、聖武天皇の時代、奈良の大仏殿建立の時、諸国から牽牛を集めて土米を運ばせた時に、当国川島庄より一人の民が、白い牛を牽いて他の牛に抜き出て土米を運ぶ奇怪な事があった。これが天皇の耳に達し、この牛の耕作の役を解き、飼料の輪宣を下し、牛主へ国守の号を賜った。当所の庄号を牛発の庄と改められ、白牛の旧跡であることに依って白牛山龍蔵寺の号を賜った。その後、また勅定があつて、その牛像を刻んで堂を建てて安置し

⑩ 竜蔵寺

- ③③ 一里山
- ③④ 方ヶ嶽
- ③⑤ 高焼山
- ③⑥ 佐々並川支流
- ③⑦ 根引峠
- ③⑧ 土橋
- ③⑨ 佐々並市

【新切というのは、昔、この場所は深い山で道がなく、自然と新で切り開いたことよって新切と唱えたと、民間の説にある】

【当社は、昔、ここに五郎兵衛という者がいて、夜中に近所へ出かけたところ、空中より天狗がやって来て、五郎兵衛をつかもうとしたため、天狗の片羽を斬ったところ、豊田（下関市）の下山（華山）へ行つて死んでしまった。ある時、五郎兵衛へ、「我が死骸を新切で貴布祿の明神として祀り、今より霜月初申の日に祭事をなすべし」とのお告げがあり、いっしょに当地に小祠を建立した、と民間の説にある】

【この一里山は、三田尻船場より九里、萩唐樋札場より三里】

狼煙山。野丸ヶ嶽ともいう。茶白山と鼓ヶ嶽（佐々並）を中継した。

涼木、栗木原を通り、川下の佐々並で、佐々並川の主流と合流する。

【この小道は、佐々並の舞ヶ谷を通り、篠目村の見付へ行く】。中国地方では「峠」を「峠」と書き、「たお」「とう」などと呼ぶ。

現在は石造刎橋が架かっている。「国登録有形文化財「落合の石橋」。

国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。「行程記」では、建物などが「分間用捨」（縮尺通りに描かないことを許すこと）で描かれており、とくに密集

- ②② 御駕籠建場
- ②③ 鉄砲札
- ②④ 鮎取事停止之札
- ②⑤ いすのこ嶽
- ②⑥ 明木川
- ②⑦ 明木村
- ②⑧ 御高札場
- ②⑨ 一里山
- ③⑩ 赤間関街道（中道筋）

十三町、萩唐樋札場より一里】。「国史跡「萩往還」。

藩主の駕籠を置いた休息所。

藩が鉄砲による狩猟を禁止した札。

藩が鮎漁を禁止した札。

石の巷山。狼煙山として茶白山（椿西）と高焼山（明木）を中継した。

明木市の中心を流れ、阿武川に合流。【この川上は、明木村の八代雲雀山より出る】

【明木村は、昔は中村といった。毛利氏が安芸国在城の時、再検地を命じられた際に、検地の帳面を一番に提出した褒美として安芸守の地名を賜っていたが、いとなく字を誤つて明木と唱えるようになったと、里人の説がある】

元文五年（一七四〇）には、切支丹宗門禁制札など八枚の高札が掛けられていた。

【この一里山は、三田尻船場より十里、須恵刈屋（山陽小野田市）より十三里、赤間関より十七里、萩唐樋札場より二里】

【この道は、美祿郡秋吉・河原・大嶺・厚保、厚狭郡吉田（下関市）へ行く。萩より吉田まで十四里、赤間関まで十九里】。分岐点には、慶応三年（一八六七）建立の「右せき道、左山口みち」と刻まれた道標があったが、現在は、JAあぶらんど萩明木前の交差点に移設。

- ④6 岩城山
- ④7 板橋
- ④8 地藏
- ④9 百池
- ⑤0 脇道
- ⑤1 板橋
- ⑤2 一里山
- ⑤3 逆修石
- ⑤4 口屋
- ⑤5 国塚

狼煙山。方ヶ嶽(明木)と鼓ヶ嶽(佐々並)を中継した。

【板橋、長さ四間】

地藏屋敷・首切り地藏。宮野方面への脇道の目印となっていたものか。

【百池というのは、この池の小鴨に旅人が銭百文を投げたところ、鳥が飛び立ち、銭が池底へ沈んだことによる】

【この道は佐々並の中の作小木原八丁埜を通り、宮野仁保市へ行く。日南瀬往還筋より仁保市まで二里二十町】。現在、痕跡をとどめていない。

【板橋、長さ四間】

上長瀬一里塚。里程を記した塚木は、御立山(藩有林)から採り、村の負担で建てられた。【この一里山は、三田尻船場より七里、萩唐樋札場より五里】。〔国史跡「萩往還」〕。

【この大石は、先年山口一の坂金山が盛んであった時、山師小田川備後の石碑と民間に言い伝えられている。銘文があるがよく分からない】

道路通行人の取り締まりや警戒にあたるもので、番所と似た機能を持っていた。周防・長門国境の碑。現在は、「南周防国吉敷郡、北長門国阿武郡」と刻まれた、文化五年(一八〇八)の石柱が立っている。〔国史跡「萩往還」〕。

- ④0 西岸寺
- ④1 板橋
- ④2 御高札場
- ④3 長松寺
- ④4 御茶屋
- ④5 一里山

地の家数は、必ずしも実際のとおりではない。江戸時代、佐々並市の往還沿いの家数は六二軒であったが、絵図では三〇軒程度となっている。浄土真宗。慶長のころに佐々並中畑から移転。参勤交代時に動員される人馬の配置所になっていた。

市の中央を流れる佐々並川に架かっていた。【板橋、長さ十二間】。

この高札場には、元文五年(一七四〇)には、切支丹宗門禁制札など八枚の高札が掛けられていた。

はじめは山口にあつて長勝寺といつた。大内氏滅亡後に佐々並に移り、長松庵と称した。慶長九年(一六〇四)、毛利輝元の萩入城の際、同庵で昼の休憩をとつたことから、のちに御茶屋(藩主の宿泊・休憩所)とされた。このため、絵図の位置に移転し、寺名も長松寺と改めた。明治三年(一八七〇)、他寺と合併し、長松寺は廃寺となった。

もと長勝寺(長松庵)を召し上げて御茶屋としたもの。一九四坪の本館、御長屋門、御蔵、御供中腰掛、仮御馬立、御番所などがあつた。現在の佐々並市区公会堂敷地。

【この一里山は、三田尻船場より八里、萩唐樋札場より四里、明木の新切の一里山よりこの一里山までの間に新道があるため、五十九間過ぎている】

鶴江浦

中の倉

無田ヶ原
浜崎

松本市



椿東分

船津

*村境

川島庄



1 石州街道

椿東分

「石州街道」は、周防国・長門国から石見国（島根県）へ向かう街道です。石州街道には複数のルートがありましたが、萩市関係では「仏坂道」「唐橋札場」萩市下田万仏坂、「土床道」「白坂道」の3ルートが通っていました。日本海沿岸を進む「仏坂道」（椿東松本市の分岐点までは3ルートと山代街道が重複を、寛保二年（一七四二）の「御国廻御行程記」で紹介します。

赤坂峠



小畑浦



長添山

土居

馬場

徳山領
大井村



* 村境

門前

萩本藩領
大井村

大井浦

猪ノ熊

4
大井



松原町

須佐村
横町
本町



須佐浦

高山

5
須佐



松園

下田万村

椿



6 江崎

江崎村

江崎浦

* 村境

江津中山



石州街道解説

図中番号・名称

解説(一) Ⅱ 絵図中の由来書の大意を、現代文で記したものを。(一) Ⅱ 関係の指定文化財

- ① はす池
- ② 船津
- ③ 団子岩山
- ④ 東光寺

【船津というのは、昔、ここまで潮水の入り江であったことから名付けられた。ここに松村長助という町人がいて、船津を開作したことから松村開作といい、蓮池を松村池といったと、里人の説にある】

吉田松陰は、この山麓の椎原で、天保元年(一八三〇)、萩藩士杉百合之助の次男として生まれた。現在は、建物の敷石と松陰産湯の井戸が残っており、近隣に松陰と金子重之助の銅像が建っている。

黄檗宗。元禄四年(一六九二)、三代藩主毛利吉就の建立。吉就は、若くして黄檗宗に帰依し、本山万福寺を手本に広大な堂宇を建立した。開山は、萩出身の高僧慧極道明禪師。吉就の没後、ここを墓所とし、以後、毛利氏(奇数代藩主)の菩提寺となった。境内には、幕末、禁門の変の責で自刃した福原・国司・益田の三家老ほかの「元治甲子殉難烈士墓所」がある。「重要文化財」[総門]「三門」[鐘楼]「大雄宝殿」、国史跡「萩藩主毛利家墓所」。

- ⑤ 一里山

石州街道の土床道・白坂道に建つ一里山。【赤間関より十九里十二町、安芸境亀尾川(岩国市)より二十四里十六町、石見境野坂(山口市)より十里、石見境白坂より八里十三町、石見境土床より十里】

- ⑥ 三輪休雪茶碗釜

現在の人間国宝・三輪壽雪窯。

- ⑦ 無田ヶ原

【むたが原というのは、昔、この近辺は深山で、猪や鹿が多く出てぬたうつ(草や泥土の中に寝転ぶ)ことからぬたが原といい、また昔、この近辺に田が無かったことから無田が原という、里人の説にある。両説とも不詳】

- ⑧ 御船倉

藩主の御座船を係留した場所。大船倉を中央にして左右に小船倉があったとされ、絵図には三棟の御船倉が描かれている。その後、明治初めころに取り壊され、現在、中央の大船倉が残っている。[国史跡「旧萩藩御船倉」]。

- ⑨ 坂新兵衛茶碗釜

現在の坂高麗左衛門窯。【高麗焼物の事。文禄慶長の役の時に、毛利輝元が朝鮮国から兄李(李)光、弟ハシヤムクワン(李)敬、兄弟の焼物師を召し連れて帰った。兄は山村作之允、弟は坂本高麗左衛門と名付けられ、松本で鼓が嶽の山を賜り、ここに住んで焼物細工をした。その子孫は代々焼物師を相続し、当所のほかに深川(長門市)、須佐にもある。鼓が嶽を唐人山というが、高麗山とか朝鮮人山とかいうべきものを、先年より唐人山という】

⑩ 鶴江

【鶴江は、昔、雌雄の鶴が巢籠もりをしていたことに由来すると、里人の説にある。八江萩の一つ「鶴江夕照」。歌に、「鶴のいるいり江のむらの松はらに 残る夕日の影そしつけき」】

⑪ 灯籠堂

松本川の河口、鶴江浦の先端に置かれた灯台。

⑫ 古城山

【無田が原の城山は、昔、尼子家臣松倉伊賀守の出城である。伊賀守と椿の茶臼山城主大内の侍岩成豊後守と椿川原で合戦があった。その場所を陣原という。この城山の麓に千人塚の畦がある。由緒は不詳】

⑬ 千人塚

松本川の河口付近は狭く、たびたび洪水の被害を受けた。このため、安政二年（一八五五）、長添山と南側の鶴江台の間に姥倉運河を開通し、防災と船舶通行の便が図られた。麓の護国神社境内に、第一大隊ほか長州諸隊士を祀った長添山招魂社がある。〔萩市史跡「長添山古墳」〕。

⑭ 長添山

【赤間関より二十五里十二町、萩より一里、石見境仏坂より十一里】、【唐樋札場よりこの一里山まで二十七町二間】

⑮ 一里山

当地の恵美須ヶ鼻造船所で、安政三年（一八五六）、萩藩最初の洋式軍艦「丙辰丸」が、万延元年（一八六〇）には二隻目の「庚申丸」が建造された。恵美須ヶ鼻造船所跡は、「九州・山口の近代化産業遺産群」の構成資産。

⑯ 小畑浦

⑰ 見島

見島は、萩沖約四五キロメートルの日本海上にあり、山口県の最北端に位置する。かつては一島で「見島郡」を構成していたが、明治二十九年（一八九六）、阿武郡に編入。〔国史跡「見島ジーコンボ古墳群」、国天然記念物「見島ウシ産地」「見島のカメ生息地」〕。

⑱ 大筒台場

萩藩の台場（砲台）で、大筒の射撃訓練の場所。対岸には目標となる「大筒星場」が記されている。海上には朱線が引かれ、「此ケビキ大筒丁場」と書かれており、この線上が射撃区域とわかる。

⑲ 越ヶ浜

【越ヶ浜というのは、笠山と本土を繋ぐ所が州浜であり、波が打ち越す場所という意味で、波を略して越ヶ浜と呼んだ。また、越というのは北と同じ意味で、萩城より北の浜という理由で地名となった。ここには猿が多く、群れて戯れている。風景は言語に尽くしがたく、他郡に希なる景勝地である】

⑳ 笠山

標高一二二メートルの活火山。麓には、御茶屋（藩主の休憩所）や高札場があり、明神池も描かれている。〔国天然記念物「笠山コウライタチバナ自生地」〕。

㉑ 里程書

【石切通しより猪ノ熊坪一里山まで十九丁三十間】。このように、「御国廻御行程記」は、藩主の御国廻り用の絵図であるため、一里山以外でも、街道のポイントごとに里程が記されているのが特徴。

②② 御腰掛茶屋

②③ 大井村

②④ 大井川

②⑤ 阿武の松原

②⑥ 八幡社

②⑦ 益田越中田屋

御本陣

②⑧ 一里山

②⑨ 木戸

③① 笠松山古城

御国廻り（領内巡視）の時、藩主が小休憩した場所。

大井村は、大井川をはさんで、萩藩藩領（当島宰判）と徳山領に分かれていた。

【船橋長さ二十五間】。船橋は、船を横に並べてつなぎ、その上に板をかけ渡して橋としたもの。ちなみに、萩往還の佐波川も船橋であった。

【大井村というのは、上古、阿武伊と書き、いつの頃から現在の字に書き誤った。阿武郡阿武伊なるが故に、この松原を阿武の松原という。古歌に、「はかなしや心つくしに年をへていつ共しらすあふの松はら」。あんの郡というのは俗語で、本来の意味はあふの郡という】

大井八幡宮。中世末期まで阿武郡の物社として崇敬を集めた。〔萩市指定文化財「大井八幡宮文書」〕。

萩藩永代家老格益田氏の居館。現在、萩市須佐歴史民俗資料館敷地。

【赤間関より二十三里十二町、石見仏坂より三里】

村の出入り口に二箇所、惣門（木戸門）が設けられていた。図中には、冠木門、跳ね上げ式で、編み目の一枚扉の形が描かれている。

【笠松山古城は、民間古老の言い伝えに、吉見家の要害という】

③② 黄帝社

③③ 高山

③④ 大瀬寺

③⑤ 西堂寺

③⑥ 江崎

宝泉寺の鎮守黄帝社は、海上安全を祈願する船主や船乗りたちの信仰を集め、多くの絵馬が奉納された。〔重要有形民俗文化財「須佐宝泉寺・黄帝社奉納船絵馬」。萩市有形民俗文化財「海上信仰資料黄帝社殿」〕。

標高五三二・八メートル。須佐地域と田万川地域にまたがり、ホルンフェルス断層が広がる。山頂の斑れい岩は強い磁気を帯びており、国天然記念物「須佐高山の磁石石」として保護されている。図中には、「高野山」と書かれている。【高山というのは、昔、弘法大師が衆生済度のためこの山に登って寺を開こうとしたが、先に黄帝の霊地であるがゆえに惜しんで「谷一峯を隠された。よって百谷百峯が備わらないため大師は紀州に至り高野山を開いた。この由来によって当山を高山」といい、麓の在名も高山というと伝える】

曹洞宗。益田家菩提寺。〔萩市指定文化財「紙本墨画出土釈迦図」・「大瀬寺梵鐘」〕。曹洞宗。〔県指定文化財「西堂寺六角堂」〕。

【江崎は、昔、江津の湊といった。繁盛の地として阿武郡十八郷の年貢米をこの湊から津出しして若狭へ運んだ。その後、津波で被災し、浦人は田万の湊に居住した。のち、益田河内が当所に屋敷を構え、田万から住民を呼び戻した。この時、ここは須佐村の大江津の洲崎であることから江崎と改めたという。元来、ここは



各街道の起点・唐種礼場（『八江菽名所図画』）



越ヶ浜（『八江菽名所図画』）

- ③7 御駕籠立場
- ③8 木橋
- ③9 三ツ辻

田万村の内である

御国廻りの時、藩主が駕籠を止めて休息した場所。

田万川に架かる橋。【木橋、長さ十八間】

左へ進むと石州との国境の仏坂へ至る。右へ進めば、上田万村を通り、下小川へ至る。御国廻りの際は、いったん仏坂まで行つて、この三ツ辻まで引き返し、下小川方面へ向かった。

中山



地蔵峠

三見村



三見市

赤間関街道

1 三見さんみ

赤間関街道は、秋と赤間関(下関)を結ぶ街道で、内陸部の秋吉を通る中道筋と、日本海沿岸を進む北道筋・北浦道筋の三ルートがあります。ここでは、北道筋・北浦道筋を、「御国廻御行程記」で紹介します。「御国廻御行程記」の描く順番にしたがって、西の三見から東の橋へ向かう形となっています。

榎西分
*村境

玉江浦



奥玉江

山田村

2
玉江



川島庄

橋本町

*村境

榑町

瀬淵

榑西分

小松江

榑江

3
榑



- ⑦ 桜江
- ⑧ 脇道
- ⑨ 椿西分つばしよぶん
- ⑩ 一里山
- ⑪ 萩往還

本丸の背後にそびえ、山頂に詰丸石垣や矢倉跡などが残る。「国天然記念物「指月山」」。

桜江は八江萩の一つ「桜江暮雪」。歌に、「しら雪の夕の色は山桜江の波かけて散るかとぞ見る」。

【桜江というのは、昔、延喜帝の親王逆髪の皇子がここへ左遷させられた時、今の桜山に桜を植えられたことによると、里人の説にいう】

赤間関街道の本道は濁淵を経由するが、萩藩主の御国廻りルートは雑式町を経由する近道を通ったため、絵図ではこの道が大きく描かれている。

【椿西分というのは、椿郷を東西に分けたもの。椿郷は、昔、この山に無限に椿の原木があり、これらの木には靈験奇譚が多く、神に崇敬し、祇園神社を祀って在名としたと、里人の説にいう】

【赤間関より二十四里十二町、石見境仏坂より十二里】

萩往還は、濁淵で赤間関街道と分岐した。

赤間関街道解説

図中番号・名称

- ① 高札場
- ② 仁王におう
- ③ 一里山
- ④ 一里山
- ⑤ 玉江・倉江
- ⑥ 指月山しげつきやま

解説(一) Ⅱ 絵図中の由来書の大意を、現代文で記したものの。(一) Ⅱ 関係の指定文化財

三見市の中央にあたる辻で、現在、三見市地区の人たちによって高札場が復元されている。側の色雲寺は本陣にあてられていた。

【昔、ここに蔵王権現の社があり、その仁王門の本尊という。建立は延徳二年(二四九〇)三月二十七日、大檀那大内政弘、大内義興という】。現在、跡地に三見市仁王会館が建つ。仁王(像高一四二センチメートル)二体が館内に安置。

【地吉(下関市)より七里二十町、玉江坂より一里】

【地吉(下関市)より八里二十町、赤間関より二十三里十二町、萩より一里、石見境仏坂より十三里】

玉江と倉江は、ともに八江萩(玉江秋月・倉江帰帆)に入る景勝地。歌に、「江の水にしつく影さへ白玉をみかくハかりの秋の夜の川」「遠島や浪もひとつに碧なる雲よりいでてかへる釣船」。

本土との間にできた砂嘴によってつながれた陸繋島。標高一四三メートル。萩城



〔行程記〕(毛利家文庫、山口県文書館蔵)

およそ二二〇メートルにおよびます。作製時期は、山陽道が明和元年（一七六四）頃、中山道が明和八年（一七七二）〜安永五年（一七七六）、東海道が天明七年（一七八七）〜寛政元年（一七八九）と推定されています。山陽道は、他のルートに比べて優れた出来映えで、萩藩郡方地理図師の有馬喜惣太が描いたとみられています。藩内の街道では、萩往還が、山陽道に含まれて描かれています。このほか、萩〜俵山（長門市）〜岡枝（下関市）と八代（周南市）〜宮野（山口市）を描いた「行程記」二帖（萩博物館蔵）があります。この「行程記」には、街道の各所で、別の行程記と接続するこ

II 萩藩の街道絵図

1 行程記

萩藩絵図方が作製した街道絵図の代表的作品として、萩から江戸までの主要街道である萩往還・山陽道・東海道などを描いた「行程記」全二三帖、防長両国の外周を一巡する萩藩主の御国廻り（領内巡見）路を描いた「御国廻御行程記」全七帖があります（いずれも毛利家文庫・地誌、山口県文書館蔵）。街道沿線の集落や自然景観が色鮮やかに描かれ、地名や寺社、名勝旧跡の由来書も豊富で、江戸時代の街道沿線の様子を知る上で貴重な歴史資料です。なお、萩藩の慣例は一聞^一六尺五寸であったため、実際の里程や絵図の表記はこれに基づいています。

毛利家文庫の「行程記」は、清書された作品で、たいへん丁寧に仕上げられています。このほか、萩博物館、吉川史料館（岩国市）、八幡人丸神社（長門市）、東行庵（下関市）に、下書きや写本が所蔵されており、その総数（御国廻御行程記を含む）は五五点に上ります。

「行程記」に描かれた街道は、藩領の内外におよんでいます。藩外では、山陽道、東海道、中山道（信濃国下諏訪まで）、美濃路、畿内別路線があり、全体として萩〜江戸を往復する際の主要街道を網羅した形となっています。縮尺は七八〇分の一で、山陽道・東海道を接続すると、総延長は



「寺社旧記」(毛利家文庫、山口県文書館蔵)

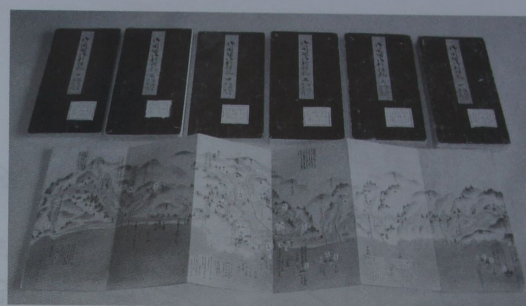


寺社に付けられたいはるは文字

のが特徴です。絵図に描かれた寺社に割り当てられた「いろは文字」と、同じいろは文字を「寺社旧記」で見ると、寺社の由来が詳しくわかる趣向になっています。藩主の御国廻り用に作られたため、仕上がりも美しく、各所の由来書も非常に詳しい内容となっています。「御国廻り御行程記」は、まさしく、御国廻りの総合ガイドブックとして作られたものだったので、

「御国廻り御行程記」は、萩藩絵図方にとって、最初の本格的な街道絵図でした。ところが、七代重就以降、御国廻り行事は廃絶されたため、この後、御国廻りで使用される機会はなくなりました。

しかし、街道絵図の必要性に注目した絵図方は、藩が関係する街道を絵図で網羅する計画を立て、諸街道の「行程記」作製に、順次取り組んでいったと考えられます。



「御国廻り御行程記」(毛利家文庫、山口県文書館蔵)

2 御国廻り御行程記

舟くにまわりおんこうていき

萩藩主の御国廻り(領内巡視)の道筋を描いた絵図です。御国廻りは、藩主の代替わりごとに行われた初入国行事のひとつです。萩を出発し、石州街道、山代街道、山陽道、赤間関街道を経由して萩に帰着する、防長のほぼ外縁を一周するおよそ二〇里の行程が、折本七帖にまとめられています。寛保二年(一七四二)、六代藩主毛利宗広の御国廻りの時に、萩藩絵図方の有馬喜惣太、岩崎四郎兵衛らが作製したものです。縮尺は、「行程記」よりも大きい五六〇〇分の一となっています。

行程記が往復両用であるのに対して、進行方向にしたがって右から左へスクロールする形となっています。景観も、常に進行方向の左上空から見下ろした視点で描かれています。このため、文字も同じ向きで書かれていて、とても見やすくなっています。

また、本図には「寺社旧記」七巻が別冊として付いている

III 絵図を作った人々 —萩藩絵図方の多彩な仕事—

本書で紹介した街道絵図「行程記」、御国廻御行程記」を作ったのは、萩藩の絵図方という絵図専門の役職でした。その仕事内容は、単に絵図を作るということのみならず、実に多種多彩であり、藩の政治や事業に深く関わっていました。

まず、最も重要な仕事は、江戸幕府へ提出した「国絵図」、「城絵図」や「城郭普請図」などの作製でした。ここで注目されることは、絵図だけではなく、村ごとの石高を記した「郷帳」、街道の内容を記した「道帳」などの関係文書も、一貫して作製していることです。

藩内向き作品も、郡図、宰判図、村絵図、開作図、知行所図、街道図など種類は豊富です。中でも特筆されるものは、享保五年（一七二〇）以降、「一」村限明細絵図」（地下上申絵図）、ならびに「境目書・石高書・由来書」（地下上申）、「寺社旧記」（寺社由来）という、領内全域の村々におよぶ大規模な地誌の編さんです。そもそも、境界紛争の解決に役立てるために、一村ごとの境界確定を目的として始まったこの編さん事業は、幕末にいたるまで長期にわたって継続されたため、絵図方は膨大な地誌情報を蓄積し、藩領の隅々にいたる地誌に精通することとなりました。

このため、幕府の巡見使や国目付の来藩時には必ず随行を命じられ、その能力を存分に発揮して、

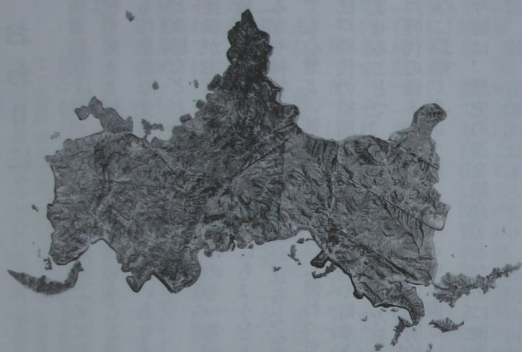


「芸州吉田行程記」（郡山城跡周辺、山口県文書館蔵）

3 芸州吉田行程記

「芸州吉田行程記」は、藩祖である毛利元就の墓所ならびに郡山城跡へのルートを描いたものです。山陽道の周防・安芸国境の小瀬川を起点とし、広島城下で分岐して北上し、安芸国高田郡吉田庄（広島県安芸高田市吉田町）が終点となっています。吉田は、毛利家にとって重要な由緒ある土地で、藩主の代替わりや毛利元就の年忌時に、郡山参詣が行われていました。本図は、他の街道絵図とはやや趣旨が異なり、毛利家にとって、祖先顕彰の重要な道筋を描いたものと思われる。

作者は、萩藩絵図方の有馬喜惣太で、宝暦十二年（一七六二）の作製とみられています。縮尺は、「行程記」と同じ七八〇分の一です。基本仕様は、他の行程記と共通していますが、毛利家ゆかりの地を通過するため、古戦場や館跡などに説明が集中しており、特に、郡山城跡周辺の由来書は、とても詳しく記されています。



「防長土図」（山口県立山口博物館蔵）

技術に加えて、豊富かつ最新の地誌情報が必須であつたことは想像に難くありません。そのためには、年に数度出張して、現地の情報収集に努めなければなりません。しかし、経費節減のため出張もままならず、苦勞した時期もありました。また、村境変更などの場合の、代官から絵図方への届け出がとどこおるなど、思うようにいかないことも多々あつたようです。さらに、享和二年（一八〇二）には、絵図方平田仁左衛門が、幕府提出書類の内容を間違えて、逼塞を命じられるなど、その用務は決して安閑としたものではありませんでした。このように、絵図方は絵図作りと格闘しながら、萩藩領に関する総合地誌情報局として重要な役割を担っていたのです。

視察先での質問に的確に答えるとともに、要求された各種の絵図を作製する重責を果たしました。さらに、幕末の動乱期には、海防や幕長戦争などの緊急事態に即応した絵図を作製するなど、その存在は不可欠なものとなっていました。絵図の作製対象が、藩を飛び越えた場合もあります。それは、すでに紹介した、萩から江戸までの街道絵図「行程記」です。これは、絵図方が江戸出張などの機会をとらえて、山陽道や東海道、中山道などを実際に歩いて作製したものと考えられます。その精力的な仕事ぶりに感服するほかはありません。

また、郡方地理図師有馬喜惣太は、明和四年（一七六七）、防長全体の巨大な地形模型「防長土図」（重要文化財、山口県立山口博物館蔵）を完成させました。大きさは、南北最大三メートル、東西最大五メートルにもおよびます。この時代に、周防・長門という国域レベルでの地形模型化に成功していることは、まさに驚嘆の一言につきまします。

萩藩の絵図は、萩藩の御用絵師雲谷派に学んだ有馬のほか、同派の絵師たちが関わっていて、美しさも目を引くものがあります。もちろん、地図としての水準が高いことはいうまでもありません。ちなみに、文化十四年（一八一七）と文政二年（一八一九）に、有馬喜惣太の孫詠次が、江戸の伊能家で修行をしていたことがわかりました。技術も、当時一流のものを取得していたのです。

一方、藩や幕府の様々な要求に応じて、精度の高い絵図を作製するためには、優れた測量・製図

おわりに

街道絵図を眺めると、あらためて気がつくことがあります。それは、かつては街道に沿って道松が延々と植えられていたということです。一筋の街道に沿って道松が両側に立ち並ぶ姿は、とても印象的な光景であったにちがいません。しかし、道松は時代とともに失われ、現在、ほとんど痕跡をとどめていません。

徒歩が主体の昔は、旅をするのも一苦労であったと思われませんが、道松をはじめとして、路傍のお地藏さんや庚申塚、小休止にちょうどよい場所の茶店や辻堂、周囲の民家よりもひとときわ高く聳える寺や神社の屋根、竈の煙が立ち上る宿場町の家並み等々、道には旅人に癒しを与えてくれる、とても心地よい景観が、たくさん備わっていたことでしょう。

江戸時代の絵図を手にした街道や町歩きは、そのような当時の情景を思い起こし、イメージを膨らませることで、より豊かな愉しみ方をすることができます。また、そのイメージを描くために、江戸時代の様子がまだまだ残っていた明治や大正の頃の、古写真や絵はがきを見てもおすすめます。

今回は、歴史の道を紹介するために街道絵図を取り上げましたが、萩藩の絵図方が作製した絵図には、城下町絵図はもとより、郡図や村絵図など、まだまだたくさんの種類があります。例えば、

山口県文書館にはこれらの絵図が多数所蔵されており、資料保護のために制限が設けられているものを除き、誰でも自由に閲覧利用することができます。各人それぞれの目的に応じた町歩きや街道散策に最適の絵図を探してみるのも楽しいでしょう。

「行程記」、「御国廻御行程記」には、本書で説明したほかにも、興味深い由来書がたくさん記されています。それらの内容を読みたいという方は、「絵図で見る防長の町と村」(山口県文書館編、一九八九)に、くずし字を読みやすくした釈文が掲載されていますので、同書をご参照ください。また、「萩往還」、「石州街道」、「赤間関街道」について詳しく知りたい方は、歴史の道調査報告書「萩往還」(山口県教育委員会、一九八一)、『石州街道』(同、二〇〇五)、『赤間関街道』(同、一九九六)をご覧ください。

それでは、これで「絵図で見る萩の街道」の話を終わります。この小冊子が、萩の歴史の道への興味を深め、絵図の持つ魅力を感じていただけの一助になれば幸いです。

【参考文献】

- 「防長地下上甲」(山口県地方史学会、一九七八―一九八〇)、「八江萩名所図画」(木梨恒充著、山県篤蔵補正、一九九二)、川村博忠「近世甲絵図『行程記』の内容と成立時期」(山口県地方史研究 第五五号、一九八六)、山田稔「御国廻御行程記」とその異本について」(山口県文書館研究紀要 第二五号、一九九八)、同「近世街道絵図『行程記』の路線図について」(同 第三六号、二〇〇九)、同「萩藩絵図方関係年表」(同 第三八号、二〇一一)、同「芸州吉田行程記」について」(同 第三三三号、二〇〇六)、同「有馬喜惣太製作『防長土図』について」(山口県立山口博物館研究報告 第二六号、一九九〇)

萩を知ろう！萩を楽しもう！萩を伝えよう！

■シリーズ「萩ものがたり」既刊タイトル

タイトル名	著者	定価
①萩の椿	吉松茂	600円
②高杉晋作100問100答	一坂太郎	500円
③萩開府—毛利輝元の決断—	北村知紀	600円
④萩まちじゅう博物館	西山徳明	600円
⑤松陰先生のことば—今に伝わる志—	萩市立明倫小学校 (監修)	500円
⑥密航留学生「長州ファイブ」を追って	宮地ゆう	600円
⑦萩と日露戦争	一坂太郎	500円
⑧萩の巨樹・古木	草野隆司	600円
⑨吉田松陰と現代	加藤周一	600円
⑩萩沖の魚たち (春・夏編)	中澤さかな/堀成夫	600円
⑪萩の史碑	一坂太郎	500円
⑫山田顯義—法治国家への歩み	秋山香乃	600円
特別編 ますらをたちの旅「長州ファイブ物語」	一坂太郎	1300円
⑬川柳中興の祖—井上剣花坊	大庭政雄 (監修)	600円
⑭高島北海 HOKKAI 萩とナンシー	高樹のぶ子	600円
⑮桂小五郎	一坂太郎	500円
⑯萩沖の魚たち (秋・冬編)	中澤さかな/堀成夫	600円
⑰若き日の伊藤博文	一坂太郎	600円
⑱宮本常一が見た萩	中澤さかな	600円
⑲海を渡った長州砲—ロンドンの大砲、萩に帰る—	郡司健	600円
⑳萩往還を歩く	中澤さかな	600円
㉑吉田松陰 人とことば	関厚夫	500円
㉒晋作の生きた幕末と萩—経営評論家から見た—	江坂彰	500円
㉓維新の精神—松本健一講演集—	松本健一	600円
㉔萩の近代化産業遺産—世界遺産への道—	道迫真吾	600円
㉕作家たちの萩 上巻—萩ゆかりの作家たち—	高木正照	600円
㉖作家たちの萩 下巻—萩を舞台にした小説や紀行—	高木正照	600円
㉗浪漫陶々	三輪休雪	800円
㉘長州ファイブ物語—工業化に挑んだサムライたち—	道迫真吾	600円
㉙萩の火山のひみつ—阿武火山群—	永尾隆志	500円
㉚萩・北浦のグジラ文化	清水満幸	600円
㉛絵図で見る萩の街道—萩往還・石州街道・赤間関街道—	山田稔	600円
㉜萩の郷土料理・家庭料理	中澤さかな	500円

販売所/萩博物館・萩市観光協会・明屋書店・道の駅・市内のホテル旅館・萩市役所受付など
 ※郵送でのご購入は、萩ものがたり事務局まで電話・FAX・Eメールでお申込みください。

萩ものがたりは、定期購読ができます。

年会費2,000円にて、年間4タイトル(4・10月発行)を定期配本。

- * 定価割引の特典があり、確実にお手元に、送料は無料!
- お申し込み方法 ハガキ・FAXでの申込み 住所、氏名、電話番号をご記入ください。
電話・インターネットでの申込みもお受けします。
- 会費のお支払い方法 申込みと同時に郵便振替用紙をお届けします。
銀行からの口座引き落としもできます。

萩
ものがたり

一般社団法人 萩ものがたり
 〒758-8555 山口県萩市大字江向510番地
 TEL 0838-25-3233 FAX 0838-26-5458
<http://www.city.hagi.lg.jp/portal/book/booklet.html>
 E-mail story@city.hagi.lg.jp

※丁本・乱丁本は発行所宛にお送り下さい。送料発行所負担にてお取り替えいたします。

刊行のことば

山口県萩市は、本州西端に位置し日本海に面します。江戸時代は毛利三十六万石の城下町として栄えました。幕末には吉田松陰をはじめ多くの逸材を輩出した明治維新胎動の地として知られています。

このようなことから全国に例をみない近世の都市遺産、明治維新関係史跡や史料、近代日本の礎を築いた多くの人物に加え、北長門海岸国定公園の自然美など「宝物」ともいふべき資源に恵まれています。

しかしながら、明治維新は風化しつつあると言われるように、かつては萩に伝承されてきた物語などが消えつつあります。

毛利輝元が安芸の国(広島県西部)から萩の地に移封され、開府してから、平成十六年(二〇〇四)は四百年の節目となります。

そこでこれを機に、萩に残る厚みのある歴史文化・人物、豊かな自然、多様な行事や風物、民間伝承、伝統産業など、後世に語り継ぐべき萩のすべてをブックレット・シリーズ「萩ものがたり」として定期的に刊行し、後世に伝承することにも、全国に向け発信することとしました。

読者の皆様が、この小冊子を活用され、萩の素晴らしさを楽しみ、理解する一助となるよう願ってやみません。



〈著者紹介〉
 山田 稔

一九六二年山口県生まれ。一九八四年広島大学教育学部卒。山口県立山口博物館学芸員、山口県史編纂室室長、専門研究員などを経て、二〇〇一年九月現在、山口県文書館専門研究員。専門は日本近世史、地図史、ライブラリーとして萩藩絵図方研究に取り組み。近著に「萩藩絵図方年表」、「山口県文書館所蔵絵図群の伝来と特質」(共著)、「長州維新の道」(下巻)「萩往還」(分担執筆)、「絵図学入門」(同著)などがある。

定価 600円 (本体571円+消費税29円)



歴史の道「萩往還」^{（石州街道）}、「赤間関街道」の起点となっていた城下町萩。近年、江戸時代の絵図を手にした古い町並みや歴史の道の散策が人気を呼ぶなか、萩藩絵図方が作製した美しい街道絵図「行程記」と「御国廻御行程記」をもとに、萩地域の歴史の道を豊富な図版で紹介いたします。特に、「萩往還」はルート全域を収録。歴史の道ファン必携の一冊です。

萩市立萩図書館
11554655

11 萩 Vol. ⑩
絵図で見る 萩の街道
2011年10月20日 第1刷発行
著者 山田 稔
発行所 一般社団法人 萩ものがたり
印刷 有限会社 マヤマ印刷